

戦

戦場の固き約束

Solemn promises in the battlefield

場

断雲

Scattered clouds

の

女たちの戦場

Women in the battlefield

固

夕焼け雲

Clouds reflecting a golden sunset

き

紫の羽織

Purple jackets

約

ワイシャツ

Dress shirts

束

螢

Firefly

木下恵介

絵はがき

Picture postcards



Solemn

Scattered clouds

Women in the battlefield

Clouds reflecting a golden sunset

Purple jackets

Dress shirts

Firefly

Picture postcards

戦 場 の
固 き 約 束
木 下 恵 介

戦場の固き約束

定価 二二〇〇円

一九八七年八月十五日 第一刷発行

著者 木下恵介 （検印省略）

発行者 石川晴彦

発行所 金株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九 郵便番号 〇一
振替 東京二八七五二七番
電話（編集）〇三二九四一一二二 （販売）〇三二九四一一二三

印刷所 凸版印刷株式会社

© Keisuke Kinoshita 1987 Printed in Japan
ISBN4-07-926513-1

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。
お近くの書店か、本社へお申してください。

■ 目 次 ■

はじめに / 3

断雲 / 5

戦場の固き約束——シナリオ / 13

女たちの戦場——シナリオ / 87

夕焼雲 / 207

紫の羽織 / 209

ワイシャツ / 221

絵はがき / 230

蛍 / 240

装
画

パ
ブ
ロ
・
ピ
カ
ソ
「
平
和
の
顔
」

Pablo PICASSO : "FACE OF PEACE" © by SPADEM Paris, 1987

装
丁

亀
海
昌
次

はじめに

シナリオ集というものは昔からあったし、近頃は文庫本にもなっているが、それらは皆映画になってスクリーンに上映されたものである。上映されなかった七人の作家の未発表シナリオ集というものが、三十年ほど前にキネマ旬報別冊として発行されたこともあったが、一人の作家の映画にならなかった二作が一冊の本になることはかつてなかった。言わば、日の目を見ることができたのである。ことに二作とも戦争ものであるだけに、私の全作品四十八作中、最も強烈に私の思いをぶつけた力作と自負しているので、この本が世に出ることは幻の映画のオープニング・ナイトを迎えたように喜びも大きい。

「戦場の固き約束」は一九六三年に書いたもので、中支の戦線を舞台にしているのは、私自身が召集された時の体験から発想したドラマだからである。作中人物の中西二等兵は、私の実感を込めて書いた分身である。沢野上等兵が、老婆が織っていた織機の経糸を切断したことも実話であるし、兵たちの会話もほとんどそのままを再現してみた。もちろん全体としてはフィクションであるが、こうしたドラマを書きたくなるような戦場だったのである。

撮影所もおもしろい本だからと、一応乗り気になり、私は四、五人のスタッフと北海道へロケーション・ハンティングに行った。当時はまだ中国ロケなど思いもよらなかったからである。しかし北海道で撮影するにしても、エキストラの人数、輜重隊（輸送隊）の大量な車輛の製作など、相当の製作費になるはずであった。それが中止になった原因である。悔しかったこ

とを覚えている。

「女たちの戦場」は一九八一年十月脱稿。このほうはシナリオのあとに列挙してあるように、参考書を読みあさってできる限り事実のままを再現しようと苦心した。しかし、戦場の無惨な有様は、どんなに事実を描こうと思っても映画では描き尽くせるものではない。ただ迫れる所まで迫ろうと、あがくだけである。でも私が懸命に事実に向かうとする誠意こそが、フィリピンの戦場で命を落とした百三十名に及ぶ看護婦さんたちへの心からの祈りだと思い、創作場面を極力排したのである。ところが、そのことが（暗すぎる）という、当時の大谷社長の感想となつて、乗りかかっていた担当重役、製作責任者の踏み出した足を止めてしまったのである。すでにフィリピン、台湾のロケーション地も決まっていたが、「戦場の固き約束」同様、製作費のこともあつて中止になつてしまった。

日本の映画製作とはそういうものである。監督はそこで苦勞するのである。

シナリオの他に、私が若いころに書いた日記のような随筆「夕焼雲」の四編と、ここに発表した戦争物二作を書かざるをえなくなつていった私という映画監督の心想を語る「断雲」^{ちぎれぐも}も、この本に発表できたことはありがたい嬉しきことである。

一九八七年六月十三日

断 雲
Scattered clouds

あの時、ああ言ってしまったことを、それで良かったのかどうか、私は今でも気になっている。

あの時と言うのは、私が最初にパリに行った一九五一年のことである。その前の年に「カルメン故郷に帰る」^{*}を撮っていて、その完成が近い頃、高峰秀子さんからパリに行きませんかと誘われていた。彼女も初めてのパリ行きであったし、試写が終わると「では、お先に。待ってますからね」と、さっそく彼女は飛び立ってしまった。だが私の方は、行くことは大賛成だが、その前にもう一本撮ってから行ってくれという会社の注文で、九州の呼子を舞台にした「海の花火」^{*}という、ひどく面倒な作品に取りかかってしまい、半年以上も遅れてパリに辿り着いた時は、彼女がパリを去る三日前であった。

まあそんなことがあってパリに出掛け、私も半年間、花の都の自由と孤独を楽しんだのであるが、行つて間もなくの頃、パリの新聞のインタビュウがあった。そして真っ先に、「あなたは、広島や長崎にアメリカが原爆を落としたことをどう思いますか」と質問してきた。今でも気になっているのは、その時私が言ってしまった一言である。

「原爆が落ちなかったら、まだ戦争は終わらなかったし、もっとたくさん日本人が死んでたでしょうからね」

フランス人の若い記者は、一瞬、意外な顔をして私を見た。多分、アメリカに対する非難の言葉を期待していたのであろう。その感じがピンときた。当時のパリには、「ヤンキー・ゴ―ホーム」という落書きが随所にあつて、アメリカ人嫌いは歩道でもカフェーでも、露骨な表情で我々日本人にもサインを送るのである。

それはそれとして、終戦の時から私の胸の中にあつたのは（何故もっと早く降伏してしまわ

なかったのか」という腹立たしさであり、その思いは今も変わらないばかりではなく、日本人の度し難い体質だと思っている。負けることが読めているのに強がってみせ、泥の中を這い回っても意地を通せばそれが日本男児であり、最後は死ねば立派だと思っている。武士道というは死ぬ事と見つけたり、が好きなのである。その上「武士道は死に狂いなり」で、そんな連中の策戦会議で国民の運命が決まるのだからたまらない。

フランスの記者は、勝つことがわかつている戦争に、あのような大量虐殺の兵器を使用することは、人道上許せない、というような言葉を期待していたかもしれないが、もともと戦争というものは、人間が人間を殺す以外に勝敗の決着はつかないものである。多く殺した方が勝ちである。もし原爆が落ちなかったら、どれだけの日本人が、いや、アメリカ人も死んでいたであろうか。終戦の年の五月頃から、本土決戦の準備はいよいよ進んで、全国民が武器をとって戦う為の義勇兵役法による国民義勇戦闘隊が編成されていた。その義勇兵役法の内容をちょっとお目にかけると、その二と四は次のようである。

二、義勇兵役は、男子は、年齢十五年に達する年の一月一日より年齢六十年に達する年の十二月三十一日迄の者、女子は、年齢十七年に達する年の一月一日より年齢四十年に達する年の十二月三十一日迄の者が服役する。尚右服役期間は勅令の定むる所に依り必要に応じ之を変更することが出来る。

四、義勇兵は必要に応じ勅令の定むる所に依って之を召集し国民義勇戦闘隊に編入され、この召集を義勇召集と称する。

勅令とは、天皇の大権により発せられる命令である。そしてこの義勇兵役法が公布されたのは、沖繩戦が一般島民十六万人以上が無惨にも殺されて終結した六月二十一日の翌日、二十二日に公布されたのである。まだ国民を殺す気でいたのである。そして、国民義勇戦闘隊の要員は、二千八百万人であったという。もし本土決戦にでもなっていたら、この内の何百万の老若男女が死んでいたことか。戦争中の大本営陸軍作戦課長であった服部卓四郎氏の書いた本土決戦の基本思想の中に、次のようなことがある。

「本土の特性は、皇国守護の忠誠と不敗の大和魂に凝り固った一億の国民が、軍に協力し軍と共に戦う外、地の利は絶対的である。――本土のこの特質に勝利の基礎を認めて、先ず速かにこの本土の特質を発揮し得べき必勝の戦略態勢を確立し、皇土の万物万象を戦力化する。敵軍の来攻にあたっては、一億特攻の攻撃精神を発揮してこれを撃滅し、敵軍の一兵といえども生還せしめない覚悟を以て、勝利か然らずんば死かの一念に徹し、刺し違えの戦法を以て戦う。」

今の人がこれを読んだら笑ってしまふだろう。だが、そうとばかりは言えないから恐ろしいのである。

私が三島さんと初めて会ったのは、あの時のパリ滞在中であった。三島さんというのは三島由紀夫氏のことである。私がパリで親しくしていた東京新聞の特約記者、笹本さんという人から電話があり、「三島さんがパリに来て早々、お金をすられてしまつて困っている」と言うのであった。一九五二年の初夏の頃ではなかったかと思う。その頃私は、最初に宿泊していたモンパルナスのホテルを引き払って、十六区のブローニュの森に近い「ボタンヤ」という日本料

理店のアパートに住んでいた。当時はまだ日本人の数は少なく、「ボタンヤ」はただ一軒の日本料理店ではなかったかと思う。店は一階だけで、六階ぐらいの建物だったと思うが、上はすべてバス付きのアパートであった。

「もし良かったら僕のアパートに来たらどうですか。ここなら僕が話せば、部屋代も後払いで待ってくれるけど」

三島さんの若い頃のことである。矢張り初めての海外旅行で、ギリシャを見てからパリに来たのだが、来る早々ちょっと欲を出したばかりにとんだ失敗をしたのである。原稿料の前借りで来たと言っていた。その旅費の殆どをトラベラーズ・チェックにっていて、銀行で正規に取り替えて貰うと損で、街の中でいくらかでも有利に交換できると誰かに教えられていたようである。怪しげな男が「チェンジ、チェンジ」と声を掛けてくるし、私は注意されていたので引っ掛かったことはなかったが、夜の寂しい裏街の教会へ二度ほど連れて行って貰ったことがあった。その頃はドルが不自由な時であったから、教会のお坊さんもドルが欲しかったのかもしれない。私は裏門の近くに待たされて、絵の勉強に来ている某氏が密かにフランと交換してきてくれた。そしてお礼に食べて飲むのである。だが、そんなことは三島さんは知らない。少しでも得をしようと思うのは人情である。何しろ、海外旅行に持ち出せるドルは厳しく制限されていた時のことである。三島さんが引っ掛かったのは、オペラ座に近いグラン・ブルーボールの裏通りで、真っ昼間のことである。声をかけた男がトラベラーズ・チェックを一枚一枚数えている間、三島さんは、逃げられてはたまらないから、綴じてある所を指に力を入れてしっかりと押さえていたのだが、と言う。すると一瞬、男はアツと顔色を変えて、さも警官が来たように一方を見た。三島さんもつられてその方を見た。「早くしまっとけっ」と男はトラベラー

ズ・チェックを押して人込みに消えた。三島さんも慌てて、訳もわからず人込みに逃げたが、ほっとして、ポケットに突っ込んだものを見たら、チェックの中身はもぎ取られていて表紙だけだったのである。笑っては悪いが、私はおかしかったし、あの高名な頭のいい三島さんにも、こんな人間味のある失敗があるのかと親しみを覚えた。

「金送れ」と日本の出版社に電報は打ったが、その金に着くまでは身動きも出来ないと言う。私の部屋は五階で、ちょうどあいていた三階の部屋に三島さんは入った。たしか一月ぐらい一緒だった。そのとき徹夜徹夜で、五日間ぐらいで書き上げたのが文学座の芝居「十日の菊」である。そして或る夜、地下鉄の終電もなくなって、エトワールからボタンヤまで二人で歩いたことがあった。ゆっくり歩いて四十分ぐらいの距離だったと記憶するが、ピクトル・ユゴーの歩道を、ガス灯の燃える音を聞きながらコツコツと靴音を鳴らして歩くのは、ほろ酔いも手伝って異国の情緒満点である。だが、私という人間はどうしてこうなのかと、自分の損な性格を百も承知で、でも一度聞いてみたいと思っていたことを口に出してしまった。

「三島さんのような頭のいい人が、もっと国の政治に対して発言してくれたいと思うんだけど。どうして我関せずみたいな顔をして一言も発言しないんですか。小説家だって日本の運命の中で生きてるんでしょう。だったら、こうなって欲しいという願いはあるはずじゃあないですか？」

何しろ、三十五年前の事だから、質問した私の言葉も、答えた三島さんの言葉も、今書いているそのままではないが、言ったこと、言われたことの意味ははっきりと覚えている。

「小説家ってね、そんなことはどうでもいいんだ。日本の国がどうなろうと、小説家が書くことは別のことだからね、僕が書きたいことはさ」

それはそうだろうと思った。だが、日本の社会の、その中に生きる人々の日常生活を描く映画監督としては、自分も人々も一緒に悩み、一緒に幸せになりたいのである。それを自分の損な性格と言ったのである。誰がどうなろうと、三島さんのように言いきれぬ映画監督だったら、どんなに気楽なことか、と思うことだってあるのだ。だが私は、やむにやまれぬ気持で、「戦場の固き約束」を書き、「女たちの戦場」を書いてしまう。そして三島さんの方は、何故クーデターを呼びかけてまであんな死に方をしたのだろう。パリのあの夜から十八年、「日本の国がどうなろうと——」と言っていたあの人が……。

私が初めに、本土決戦の基本思想について、「今の人がこれを読んだら笑ってしまうだろう。だが、そうとばかりは言えないから恐ろしい」、と言ったのはこのことである。三島さんほどの人が、あのむごたらしい死を賭して言い残したことは、あの基本思想と一脈相通じているように私には思えてならない。そして、完璧に日本人であろうとし、日本人でなければ考えられない死にざまをもって、自分を清らかなものとして飾ろうとしたのであろうか。私は日本人らしくとか、日本人として、とかいう言葉が大嫌いである。

なつかしい人でもあるし、
思い出したいくない記憶でもある。

※「カルメン故郷に帰る」

日本天然色映画の第一号。高峰秀子が演ずるカルメンと呼ばれるストリッパの物語。50年代初めの風俗がよく描かれている。

※「海の花火」

北九州・呼子港に生きる人々の生活と恋愛を描いた作品。木暮実千代、三国連太郎主演。

戦場の固き約束

Solemn promises in the battlefield

降るような星空である。

しかし、遙かな山の稜線がかすかに明るく、戦場の朝が明けはじめている。

昭和十七年、初夏。中国。

姿は見えないが、今日の戦闘に出発する各部隊の号令が聞こえる。鶏の音がする。

その頃から、あちこちの民家が火をふきはじめる。日本軍の放火である。

その中を出発して行く歩兵部隊、工兵隊、そして輜重隊（輸送隊）も――。

丘陵に囲まれた麦畑

砲声。銃声。

夜はすっかり明けている。日本軍は麦畑の中の道に釘づけになり、敵は左右の丘陵の上から、しきりに撃って来る。戦車隊が攻撃。歩兵は散開して進んで行く。

部隊本部

観測兵が観測鏡を見ながら報告している。

観測兵「正面の高地を友軍が攻撃中です。左の高地は完全に友軍が占領したようであります。

中間の林の中に敵の砲兵陣地のあるのが見えます。二つ、三つ、です。本道沿いに敵が退